

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 30 (R元. 12. 11発行) 文責 校長 福田雅也

寛容の心

「ドライビング Miss デイジー」

30年近く前の映画の題名です。ご存知でしょうか。私に近い年代で映画が好きな方はお分かりいただけるかと思えます。1990年第62回アカデミー賞で作品賞を受賞した作品です。主演はジェシカ・タンディ(この作品で同年アカデミー賞主演女優賞を受賞)とモーガン・フリーマン。私はこの映画がとても気に入ってます。公開当時、映画館で見たことはなかったのですが、衛星放送での放映をたまたま見た時、引き込まれるように最後まで見入ってしまった作品なのです。その時は、アカデミー賞を取っていたことすら知りませんでした。そのストーリーを簡単に紹介しますと、1950年代から60年代を中心に物語は流れ、裕福な暮らしをするユダヤ人の老女とその運転手となった黒人男性との心温まる交流を描いたお話です。ストーリーの中心は、二人の心がつながっていくことなのですが、展開の中でその時代の大きな問題を表現している部分があるのです。前述のユダヤ人と黒人という言葉でお分かりになるかもしれませんが、人種差別の問題です。最初は、黒人の運転手に偏見を持っている老女ですが、その運転手の人柄にふれ、次第にその偏見がなくなり、人間的関係が深まっていきます。しかし、その老女もユダヤ人やユダヤ教が迫害される現実を突きつけられるのです。

なぜ今回このような記事を書いたかという、今の世の中の状況が「寛容の心」を失っているように感じているからです。例えば前述の映画が作られた国、アメリカの状況です。ご存知のようにアメリカは移民の国であり、多種多様な人種が国民を形成しています。その過程では、上のような人種差別も経験してきたのです。しかし、それらを乗り越え、自由で民主的、先進的な国家へと成長してきたと認識していました。そのことが「ドライビング Miss デイジー」にも描かれていたと思うのです。ところがどうでしょう。そのアメリカは、過激なリーダーを選び、「アメリカ・ファースト」「移民排除」等の信じられないような民意で動いているのです。加えて、日本を含めた多くの国々が自国優先主義になっているように感じます。もちろん、それらは人種や宗教だけではなく、様々な問題が絡んでいることは分かっています。今の状況がそのまま続くとは限らないとも思います。しかし、少なくとも、今、自由で民主的で先進的な心の重要な部分である「寛容の心」が薄れ、自己中心的になってきているように感じてしまうのです。

そして、これと似たような状況は私たちの身の回りでも起こっているような気がします。例えば、ネット上で繰り返される匿名での誹謗中傷などです。

私たちは、今の世の中、この時代の流れの中では無力感を感じます。しかし、身の回りに目を転じると、目の前には未来ある子どもたちがいます。この子どもたちに「寛容の心」や、大切な人権感覚を育てていくことは、私たちにできることです。今週末までの二週間、本校は人権旬間に取り組んでいます。各学級、学校全体で人権に関する学習を深める二週間でした。

私たちは、できることを大切にしながら、しっかりと取り組んでいくことしかできないと思えます。そして、それこそが大切なことだと感じています。